

Title	救援と救済のジレンマ(分科会 2 支援と宣教(宣証))
Author(s)	鈴木, 真
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.58, 2014.11 : 87-91
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=5302
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

【第三回東日本大震災国際神学シンポジウム】

分科会2 支援と宣教（宣証）

救援と救済のジレンマ

鈴木 真

はじめに

被災者に関わり、被災地での支援をする多くのキリスト教支援グループの一つとして、被災地でのキリスト者としての「証し」としての救援と救済活動の中で、問われたことを一言で表すと「救援と救済のジレンマ」ということであつた。

被災者たちのジレンマ

被災者たちが持つ支援を受ける側としてのジレンマは、宗教団体から支援を受ける時の「宗教に対する警戒心」がある一方、今回の震災で家族や知人を一瞬のうちに失い、また生活の基盤を根底から壊されたことを通しての「生きる

意味」あるいは「生き残ったことへの罪責観」からの心の飢餓感に対しての宗教への一見矛盾した期待がある。単に物質的な支援では届かないことは被災者自身がわかつていることであるように思われる。多くのキリスト教支援グループの当初の活動は、その面で支援と宣教を取り引きのようにすることがないように配慮がなされていたと思われる。そして、おおむねキリスト教団体の支援は被災地では良い印象を与えていたと思われる。しかし、問題はこれからである。

教会の中にあるジレンマ

そもそも三〇名前後のサイズの教会が多い日本で、震災前から神学校入学者の減少、教会学校の衰退、クリスチャン人口の減少傾向が続いていて、日本宣教の閉塞感がただよっていた最中での震災経験であった。支援する側である教会にとって震災支援は、自らの教会の脆弱さを抱えつつ、同時に聖書が教えている隣人愛の実践に対してのチャレンジとして受け止めることができるであろう。しかし、震災から三年が経過する中で、長期化する支援活動と足元の教会形成の両立ということに、震災活動に関わる教会の牧師と信徒の中での葛藤が起きていることも見え始めてきている。また支援組織を支えている支援教会も今後の展望に対して模索する段階となつてきている。

さらに、今回の震災が今までの自然災害と際立つて異なるのは、震災による原発事故から福島多くの市町村が放射能の被害を受け、さらに今でも脅え、津波や地震被害以上に重くのしかかっていることであろう。そしてそれは長期にわたつて地域の復興の足かせとなるであろう。そのような中で、福島の教会、そして支援をしている諸教会には宮城や岩手の被災地支援に関わっている教会とは異なつたジレンマを抱えていると思われる。

福島の被災地に近い教会の中には放射能汚染の危険な状況の中で、避難した教会員と様々な事情で避難せずに残らざる

るをえなかった教会員との意識の分断がある。さらに、小さな子どもを抱えた牧師家族が家族を守るため一時避難したことへの残された信徒からの批判をめぐって、単純な殉教精神で語ってはいけない教職論の本質に関わるような重い神学的課題を、今でも福島牧師たちは抱えている。それを被災地から離れている牧師たちは他人ごととして捉えているのだろうかということが問われている。

従来の神学的枠組みと現実の日本宣教のギャップ

私たちの支援グループは主に南三陸町、石巻で活動する中で、東北の沿岸部にある日本の原風景のような伝統的コミュニティである「講」の存在を知った。しかし震災前から過疎化と地域の高齢化社会の中で、そのような地域の人々の絆を支えているコミュニティはすでに壊れかけていた。今回の震災は地域の人々のコミュニティの崩壊に拍車をかけるであろう。そして伝統的民俗社会の構造が変わっていくのではないかと推測される。そして、そのしわ寄せは高齢者や生活弱者に重くのしかかってくる。行政を超えたところにあつた民俗社会のしくみの崩壊は、生活弱者を守る手立てが失われることにつながる。

震災支援に関わり、またその地域で震災をきっかけに宣教活動を開始している教会が、その伝統的なコミュニティに代わるキリスト教的コミュニティを形成できるかどうか、そのことが問われるのではないかと思われる。

ある被災者の問いかけ——「あなた方キリスト教徒は一五分で仏教徒になれるのか」

そこで問われることは、今までの私たちプロテスタント、特に福音派の福音理解であろう。その再吟味が問われるのではないか。

いわゆる福音派は社会派と呼ばれるグループに対して距離を置いて、イエス・キリストの福音を宣べ伝えること、いわゆる「伝道」「魂の主體的救い」ということを最大関心事としていた。そして「主體的信仰」ということで「個の確立」に基づいた伝道方法、そして「救いのメッセージを伝える」という使命感と価値観で日本の宣教活動をしてきた。ある時、被災地で被災者たちを集めての集会の最後に支援活動にきた外国の伝道者がメッセージをして最後に呼びかけた。「みなさん、今日、あなたの命が終わるとしたら、あなたは天国に行ける確信がありますか？　今、イエス・キリストを信じ『救い』を自分のものにしてください。天国行の切符を手にしてください」と招きの言葉をかけ決心を促した。その時、肩をすばませてうつむいて伝道メッセージを聞いていた人が、終わった後で、支援活動でお世話になった宣教師にこう聞いた。「先生、あなたはキリスト教徒ですよ。ならば聞きますが、あなたは仏教のお坊さんがこのようなお話をしたら一五分で仏教徒になれますか？」。

ある集会でこの話を、「日本の宣教で大事なことは他宗教を断罪的に見るのではなく、対話する姿勢を福音派は持つべき」という話の中でしたら、ある福音派の牧師という方が、「聖霊が働けば、一瞬で信じるのではないですか。彼ら『ノンクリ』はサタンの手中にあるのです」と反論された。このような理解は結構福音派の中に多いのではないだろうか。

宣教から宣証へ

私たち南三陸町を支えるキリスト者ネットワークの仲間は「傍らに寄り添って問答を通してキリストを証ししていく」ことに重点を置き、地域の中で、東北の地域性を考慮した福音を言葉だけでなく、行いを通してキリストの愛に生きるキリストの弟子の姿を見せていく働きとして「宣証」ということを提唱している。今後、さらに支援と宣教の実践の中から、また今回のようなシンポジウムを通して神学的な整理を積み上げていきたい。

* 今回字数の制限で十分に書くことができなかったが、以下の書籍を参考資料として使用した。

北森嘉蔵『日本の心とキリスト教』（読売新聞社、一九七三年、絶版）、稲場圭信、黒崎浩行編著『叢書 宗教とソーシャルキャピタル 4 震災復興と宗教』（明石書店、二〇一三年）、小山晃佑『水牛神学』森泉弘次訳（教文館、二〇一一年）、Bruce W. Winter, *Seek the Welfare of the City* (Eerdmans, 1994)

* なお、福島教会の現状については福島キリスト教協議会の牧師の方々からのインタビューに基づく。